

2022年度 自己評価結果報告書

—教職員編—

1 本園の教育目標

一 心豊かな思いやりのある子どもに

二 自ら考え、自ら決め、進んで行う子どもに

◎明るく潤いのある子ども ◎思いきり遊べる子ども ◎話をしっかり聴く子ども ◎調べたり、試したり、工夫する子ども

- 1 人との関わりを通して、基本的な生活習慣・態度及び健全な心身を育成することの必要性に気付き、自ら進んでその態度・意識を高めようとする意欲を育む。
- 2 自己発揮と自己抑制との豊かな調和がとれた自律性を養う。活動と休息、開放感と緊張感、動と静などの調和を保った健康的な生活リズムを保障する。
- 3 自然と豊かに関わることを通して、その不思議さ等に気付いたり、科学的認識を高めたり、昆虫などの生命ある小さきものをいとおしむ態度を培う。
- 4 心の働きの表れである『ことば』を大切にし、喜んで話したり、聞いたりする態度を養う。
- 5 多様な感動体験を伴う生活を通して、より豊かな感性を培い、創造する力、想像する力を豊かに育む。

2 本年度の重点評価項目、評価結果、取組・達成状況

重 点 評 価 項 目		評価	取 組 達 成 状 況
分 類	内 容	結果	
保育の 計画性	3歳4歳5歳の連続性を重視し、子どもの成長発達に役立たせるために、前年度の担任と話し合う機会をパターン化させる。	A	・今年度は、3歳4歳5歳の連続性を重視して『集団の中の一員としての態度』について、各年齢の内容を教職員間で話し合い、教育課程に組み込み取り組んだ。3歳児は、聞いてもらうことや受け止めてもらう喜びを感じられる関わりを大切にしながら、話を聞くことの大切さを伝えてきた。4歳児は、周りの人に関心を持つ時期であることに注目し、自分達のやりたいことを友達と実現する為に話を聞く事の大切さを感じることを大切にしたい。5歳児は、対話を通して自分達の目標を決め活動を展開する中で、人の話を聞く大切さを伝えてきた。個々の発達段階に応じ教職員が丁寧に関わる中で、子どもたち自身が、自分の思いを聞いてもらう、自分達のやりたいことをやり遂げる、友達と考えを伝え合うなど、嬉しい気持ちや楽しい気持ちを重ねてきた。こうした生活を通し、集団の中の一員としての態度が育まれてきた。
	人の話を聴くということの自立については、多少制約されつつも集団の中の一員としての自覚を持つよう導き、教師の指示ではなく、子ども自身の必要感に裏打ちされた自立的態度化を求めて日々子どもたちと接している。	A	
	指導計画は、自己発揮と自己抑制との豊かな調和がとれた自律性を養う保育を心掛け、幼児の生活が豊かになることを目標とし、幼児が主体的に関わり、安定して遊び込める環境を活動の展開に応じて再構成している。指導上配慮を必要とする園児に対しては、個別の支援計画を作成し、情報交換を密にして共通理解をもって対応する。行事は、幼児の実態に合わせて見通しを持って取り組んでいる。これからも、実際の子どもの姿を十分に見つめながら、互いに見通しを持った保育が展開出来るよう、共通理解を深めて行きたい。	A	・子ども達の興味を教師が受け止め計画し、実際の子どもの姿から再構成しながら進めてきた。3歳児は子ども達の興味関心の様子を見ながら子ども主体の計画を立てることが出来た。3歳児の実態や個々の育ちを考慮しながら保育を進めてきた。4歳児は、電車ごっこ等、子ども達の姿をそのまま活動に繋げながら、子ども中心の保育を進め、再構成することが出来た。5歳児は、一つひとつの活動について、自分達で決め目的を見出し、活動を進めてきた。冒険ごっこを柱とし、自主性、協同性が育ってきた。 ・行事については、子ども達の興味に合わせたもので行うことで、伸び伸びと自己発揮することが出来た。 ・個別の指導計画を作成し、各々の特性を理解し、目標を決めて丁寧に関わってきた。家庭との連携を取りながら子どもの実際の姿や対応を伝え、共通理解に努めた。家庭との連携や各関係機関との連携を密に行うことで、各々の重点や必要な対応を確認でき、子どもの育ちに繋がった。今後も、その時に必要な対応が出来るよう情報交換を密にし、子どもの姿にそった計画を立てていきたい。

保育の在り 方 幼児への 対応	ひとりひとりのありのままの姿を受け入れ、幼児の気持ちに共感しながら“個と集団”の関係を常に考慮し、発達段階や個の特性に応じた、見通しのあるかかわりをしている。	A	子ども一人一人の姿を受け止め、その都度、意識して丁寧に関わってきた。特に気になる子どもに寄り添い個別の指導計画を立案し話し合いを深めてきたことで、一人ひとりの接し方や関わり方を確認することができた。個々の発達段階や特性に応じた環境設定を意識する中で、個々として集団を考慮した関わりなど様々な環境の工夫の大切さを改めて感じた。さらに教職員間の中で共通理解を深め場面に応じた関りや対応の仕方を実践していく。
	他のクラスや異年齢の幼児と関われるよう、様々な保育の形態を取り入れ、指導上配慮を必要とする園児については特に情報の交換を密接にし、共通理解をもって対応している。	A	- 異年齢の関わりが持てるように工夫してきた。担任が異年齢のクラスを意識し保育を展開していく中で年長児に対する憧れや小さい友達への優しい気持ちなどが自然な形で芽生えていった。さらに様々な保育形態を検討し意図的に計画していきたい。 - 指導上配慮を必要とする園児については、情報交換をしながら進めてきているところである。今後も、家庭や専門機関との連携を取りながら個別の指導計画での話し合いを生かし、共通理解を深め適切な関りが持てるように努力していきたい。

研 修 と 研 究	人間形成のために、本園の教育目標Ⅱ『自ら考え、自ら決め、進んで行う子どもに』を重視し、“幼児一人ひとりが人間として命を大事にして生きていくこと”と“自分に対して誠実に生きること”ということを願い、遠い将来を見通した幼児教育を目指している。	A	・自分たちで考えて行動する喜びを感じながら活動出来ることを大切にしてきた。相手の話を聞いて考え行動する事が少しずつ定着してきている。 ・年長児は理事長先生の話聞き、社会情勢を皆で考え、自分たちに出来ることを考え合う時間を過ごすことが出来た。戦争の事、やってはいけない事等を子どもなりに真剣に考える時間となった。その中で一人ひとりが考えを友達と伝え合う事で「相手を大切に思う事」が一番大事だという事に気付くきっかけとなった。 ・福島的事も自分たちで何が出来るかを、真剣に考える事が出来た。
	教師一人一人が自らの課題を自覚し、自立していくために研鑽を深めていく。同時に各々の特性を生かした同僚性を効果的に展開し、保育の質の向上を目指すしていく。	A	・幼稚園教育要領を基に、幼児の実態を照らし合わせながら保育を考え行なった。子ども達の育ちを日々感じながら、大切な事を見逃さないように心にとめ精進した。 ・各クラスの活動や取り組み方法等に影響を受けて刺激し合ってきたことで、意識を高めながら保育実践を努めることが出来た。 ・教師一人ひとりの特性を活かした異年齢の関わりを少しずつ実践してきたので、来年度も更に深めていきたい。
	協同性と表現を大きな柱とし、保育を進める上で科学的な考察、実践的な考察を有機的に結合させていく。これは、子どもの発達の見通しや家庭や小学校との連携においてもこの視点で伝えていく。	A	・教職員間において、表現発表等保育を見せ合う場面で客観的に考察することが出来た。お互いにその後の保育に活かすことで、更に学び合うことに繋がった。 ・子どもの発達について、担任だけでなく全ての教職員に見て意見をもらうことで、見通しを持った関わりや、家庭とのやり取り等の連携に繋がった。

※自己評価欄の記入方

A；十分に達成されている。

B；ほとんど達成されているが、部分的に課題が積み残されている。

C；課題が多く積み残され、ほとんど成果が上がっていない。

3 総合評価

- ・新型コロナウイルス対策として、基本的な感染予防対策を講じて園生活の充実を目指し保育を進めてきた。マスクの着脱は場面に応じた指導を行う。
また教職員はこれまで環境衛生に努めてきたので、環境についての作業の時間配分や取り組み方法を工夫することが出来た。
- ・年度当初、行事を含む保育計画を見直す機会を持ち、主体性、協同性を育むために意見交換を行った。「運動遊び」「表現活動」「造形活動」「音楽遊び」「物語やお話を聞く文化との出会い」「農園活動」「相手のことを思い、自分たちが出来ることを話し合い、実行する支援活動」「平和について知り考える時間を過ごす」等必要であり大切にしたい内容について深めることが出来た。また保育を再構成しながら進めることを意識した。
- ・異年齢保育に於いて、これまでは主に「農園活動」「環境整備」「園外保育」「表現活動」等でそれぞれの年齢の子どもたちが内容に沿って活動し、子どもたちの成長発達にとっても重要な内容となった。来年度はさらに「音楽活動」等を加え子どもたちの成長発達を追っていきたい。
- ・集団の一員としての育ちとして、話を聞くということについて意識して取り組み、今年度も成果が表れていた。
- ・農園保育では、支援活動のために子どもたち自ら畑を拡大し、作物を育て販売し福島の子どもたちを応援することが出来た。また水やり草取り等の作業を協力して行うことで仲間意識が深まり、作物は種や苗から育てることで子どもたちに感動を与え、達成感を味わうことが出来た。
- ・保護者との幼児教育の共通理解のためにクラスだより、HP、CATV 等を活用し、また、気になることや園や家庭での様子の共通理解のために話し合う機会を設けることが出来た。
- ・園内研究会を実施し、幼小連携の架け橋プログラム「幼稚園教育から小学校教育へ」の動画を基に、遊びを通して交流を持ち、ねらいを共有化することにより、具体的な教育内容を学び、そのことにより園として保育の方向性を確認することが出来た。
- ・外部から講師を招き園内研究会を2回開催することが出来、保育の振り返りが出来、課題や構成に繋がった。来年度も継続し保育の豊かさや充実に繋げたい。

4 今後の改善点

改 善 点	具 体 的 な 取 り 組 み 内 容
○個別の支援計画の作成 ○保護者との共通理解 ○保育の計画性	・記入項目や記述方法を見直し、分かりやすく日々の生活に活かせる内容を充実させる。 ・クラスだより、写真、HP、CATV 等を活用し、園が大切にしていることや環境構成等の重要性を更に知ってもらう。 ・必要な生活態度が身につくように、また指導上配慮が必要な幼児の保護者と話し合う等、幼児理解の共有に取り組んでいく。 ・異年齢の関わりについて、年度初めに話し合い、共通理解の下で計画していく。 (音楽で遊ぼう・農園活動・園外保育・運動遊び・他) ・3歳4歳5歳の生活の連続性を確認し合い、発達段階に基づいて1年間で育て欲しい姿、生活態度の到達点を教職員間で共通理解できるように話し合い、集団生活の一員としての態度を育み、次年へと繋げていきたい。 ・個の育ちを見守りながら集団としての育ちを見通し、指導や援助を適切に行っていく。 ・来年度より「保育の在り方幼児への対応」の内容にある「他のクラスや異年齢の幼児と関わり」を保育の計画性の内容とする。 ・「行事は幼児の実態に合わせて見通しを持って取り組んでいる」に関しては、達成しているため項目から外し今後も取り組んでいく。